

分類	①気候変動に柔軟に対応できる安全・安心な国土・都市づくり	②健康で快適な国民生活と元気で豊かな地域の実現	③国民一人ひとりが行動できる環境づくり	④ベストミックス社会形成のための国際連帯	共通的な配慮事項、特に必要な連携
分野別の課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・頻発・激化する豪雨、台風被害、高温・低温、豪雪、乾燥などの極端気象現象、洪水、高潮、海岸侵食、土砂災害、河川環境の変化への対応が必要</li> <li>・浸水や濁水の頻発、水質悪化、ヒートアイランド現象の増加など、都市を直撃する影響を緩和する必要がある</li> <li>・持続可能な社会・経済活動や生活が可能な、災害に適応した強靱な社会の構築が必要</li> <li>・少子高齢化社会において公共投資に対する負担率の現状維持</li> <li>・国土の7割にあたる森林や山地などにおける斜面崩壊、土砂崩れ等の災害や生態系の変化、川の氾濫等への対応が必要</li> <li>・生態系サービス等、豊かで多様な自然環境の保全</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国民生活に直接降りかかる気候変動の影響を緩和し、豊かで快適な国民生活の維持、増進を図る</li> <li>・高齢者等の生活弱者を優先的に守る</li> <li>・活力の維持と低炭素・影響適応型社会の両立を可能にする地域づくりを進める</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国民一人ひとりが気候変動に適応し、先手を打って行動することを支援する環境、基盤づくりを進める</li> <li>・災害現場で各主体がきめ細かな対応が可能となるような取組を行う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発展途上国を含めた国際社会全体の気候変動への対応が必要</li> <li>・途上国等の地域においては、気候変動問題は、人口増大や都市への集中といった様々な懸念事項の一つに過ぎないと見なされる事が多い</li> <li>・国際的な適応連帯を育む必要がある</li> <li>・気候変動への対応を「科学技術外交」のメインストリームとして位置づけ、国際社会へ貢献する</li> <li>・適応策として行使しうる科学技術は必ずしも先端技術ではありえないが、社会システムや制度を含めた社会科学システムとしてモデル化し、知財戦略を国外に展開する必要がある</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・適応策は社会の注目度が低く、各国の取組においても緩和策と比べ遅れがち</li> <li>・地球環境保全、気候変動への対応とエネルギー消費型(資源消費型)社会の快適性にはトレードオフの関係もあることの意識の醸成が必要</li> <li>・科学技術のみならず、人文系・社系との連携による社会科学技術としての側面を持つ適応策全体の行使が必要</li> <li>・適応策として行使しうる科学技術、社会科学システムモデルのベンチマーキングにおける我が国の優位性を示す</li> <li>・ソフトパワーの重視が必要</li> </ul>
対応の方向性	<p>土地利用や都市構造、社会基盤施設と社会システムのあり方を総合的に見直し、気候変動に適応した国土構造の再構築を行う。</p> <p>このために:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 土地利用や産業誘導といったソフト施策と社会基盤といったハード施策を地域の実情に合わせて組み合わせ、気候変動に柔軟に対応できる国土を作る。</li> <li>○ 緩和と適応システムを社会に組み込むため、都市構造を変える。</li> <li>○ 森林と自然生態系を育む中山間地を社会全体で支え、保全する。</li> </ul>	<p>地域の経済活動や健康・福祉といった国民生活の基礎を構成する活動を気候変動適応型に転換する。</p> <p>このために:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 地域の実情にマッチした、低炭素・適応社会像を提示し支援する。</li> <li>○ 「ベストミックス社会」を支える地域産業を育て、持続可能な地域経済システムを構築する。</li> <li>○ 感染症予防、気候変動弱者支援対策などを推進し、気候変動に関する国民生活上の不安を解消する。</li> </ul>	<p>気候変動への適応は国民一人ひとりの理解と参加によって始めて達成されるものという認識にたち、適応行動のための情報の共有化と国民参加の支援を社会の隅々にまで行き渡らせる。</p> <p>このために:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 市民一人ひとりが参加できる適応活動を知り、参加するための情報ツールを構築する。</li> <li>○ 「ベストミックス社会」構築を引っ張るコミュニティーリーダーを育成する。</li> </ul>	<p>適応に関する各国の知恵や識見、科学技術等を共有することにより、発展途上地域を含めた国際社会全体の気候変動への対応を推進、加速する。</p> <p>このために:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>○ 国際社会全体における「ベストミックス社会」への対応を推進、加速</li> <li>○ 温暖化影響や適応方針に関する情報・知見を各国が活用できる体制の整備</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 少子高齢化や経済問題に加えて温暖化等、様々な問題をまとめた総合的な解決方法の検討</li> <li>○ 先端的な技術が具体的な行動の現場でどのように活用されているのか、モデル的な実践例の整理</li> <li>○ 在来技術の整理と、開発された技術を社会実装するためのノウハウ蓄積</li> </ul>
政策的な対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・急激に変化する災害発生に備えた対策と国づくり</li> <li>・適応策を含んだ環境モデル都市の選定</li> <li>・市街地維持のコストを考慮した土地利用の修正</li> <li>・国土計画における都市中心の観点と自然的な観念のバランス</li> <li>・犠牲者ゼロなど、被害を最小化させるための災害対策の実施</li> <li>・土地利用に関する税制優遇等に対する政府一体となった取組</li> <li>・持続可能な森林経営、森林政策</li> <li>・人工林の長伐期化と未利用木質資源の有効利用</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地産地消など多面的効果のある地域モデルの構想</li> <li>・「SATOYAMAイニシアチブ」等、生物多様性の保全と両立する伝統的な農業や自然資源の持続的利用の実現</li> <li>・雇用者の確保や産業立地の検討を含めた産業活性化</li> <li>・医療に関する基礎的研究の成果を生活に応用するための規制緩和</li> <li>・現存の社会サービスの中で、将来に渡り維持すべきものの整理とそれに対する懸念の対応方針検討</li> <li>・土地・既存施設の有効活用</li> <li>・国産材の利用促進</li> <li>・社会構造基盤変化としての農村や農業社会そのものの在り方の検討</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人情報保護と両立した活動支援環境の構築</li> <li>・災害時等の緊急時の情報公開ルール・情報セキュリティの策定</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海外における簡易な洪水予測技術の開発</li> <li>・海外における温暖化適応作物開発や養殖技術、海洋環境保全技術の開発</li> <li>・REDD(森林減少と森林劣化による排出の削減)やカーボンオフセット等の国際的な流れへの貢献</li> <li>・海外における違法伐採対策等の持続的な森林経営の推進</li> <li>・アジア・太平洋地域のネットワークを強化・構築し、温暖化予測及びその影響や適応方針に関する情報や知見を各国が活用できる体制の整備を図る</li> <li>・技術提供のみならず、他国との技術提携を含めた広い支援</li> <li>・適応のための科学技術の共有</li> <li>・国内のWell-being(幸福・健康状態)の増進と海外貢献を結びつける枠組みの推進</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・科学技術の行使のみでは成立しない。必然としての人文系・社系との連携。</li> <li>・産学官共同研究拠点の整備、共同研究開発と技術移転の推進</li> </ul>
社会経済システム面での対応	<ul style="list-style-type: none"> <li>・都市構造の変換によるコンパクトシティ実現</li> <li>・地域防災計画における気候変動影響の取り込み</li> <li>・適切な森林管理による炭素吸収能力と木質資源の有効活用</li> <li>・ヒートアイランド対策による省エネルギー促進</li> <li>・予測の不確実性を踏まえ、一定の余裕を確保した適応策の導入と既存施設の賢い運用</li> <li>・海面水位の上昇等に対応した柔軟な防護能力等の向上</li> <li>・高潮等発生時の災害リスク軽減のための予防的措置</li> <li>・水災害の監視及び情報提供の強化</li> <li>・広域的な水災害予測システムの整備</li> <li>・地域の特性に合った施策の組み合わせによる影響の緩和</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・適応策の概念を取り込んだ地方行政の推進</li> <li>・地域レベルで気候変動の影響に対する脆弱性評価手法の整備</li> <li>・生活パターン変化に対応した省エネルギー方策</li> <li>・効率的な公共交通網の整備による低炭素化</li> <li>・低炭素・影響適応型生活を可能にする公共交通モビリティの改善</li> <li>・パッシブな制御によるカーボンフリーな適応(例えば森林、緑陰を使った気候緩和など)</li> <li>・いわゆるコベネフィット施策の有効性の高度化</li> <li>・気候変動に順応した多様な農林水産業の展開</li> <li>・農林水産業等のあらゆる分野でITを活用することによる地域の活性化、生産性の向上、地域農産品等の販路拡大、世界市場への展開</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人々の行動状況に適合した情報を携帯端末等へ積極的に提供する体制</li> <li>・環境の保全行動に対してインセンティブの働く社会経済システム</li> <li>・災害発生時に迅速な情報収集を図り、関係者において情報共有する体制の構築</li> <li>・食料事情を知り賢い消費行動をする体制の整備</li> <li>・地域ぐるみで熱中症・感染症の予防に取り組む</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・森林開発に係る社会・経済的メカニズムの解明と、農山漁村の持続的発展モデル開発</li> <li>・小島嶼国等における気候変動と社会変動の両者の影響を踏まえた脆弱性の評価</li> <li>・バーチャルコミュニティ技術を活用した適応のための国際市民ネットワークの構築</li> <li>・自治体の連帯、NPO/NGO間の協働、バーチャル空間を通じた市民間の国際理解と連携を推進</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・緩和策に必要なコスト・温度上昇レベル・被害額の見積もりを基にしたベストミックス社会の実現のための適応策の目標値設定</li> </ul>

分類	①気候変動に柔軟に対応できる安全・安心な国土・都市づくり	②健康で快適な国民生活と元気で豊かな地域の実現	③国民一人ひとりが行動できる環境づくり	④ベストミックス社会形成のための国際連帯	共通的な配慮事項、特に必要な連携
技術的な対応					
【科学技術 1】 モニタリング、予測技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気候変動の影響を把握するモニタリング技術の確立</li> <li>・気候変動予測モデルの高度化と、これに連動した影響予測・評価モデルの開発</li> <li>・極端現象による大規模・重大災害等の予測・観測技術と影響評価技術の確立</li> <li>・災害発生時における衛生問題や交通網の麻痺等、二次災害・連鎖反応の予測と影響評価技術</li> <li>・自動海洋観測機器や観測船、人工衛星による海洋・地球観測技術</li> <li>・自然生態系のモニタリング技術、生物多様性モニタリングの強化</li> <li>・河川流域規模の気候変動による水環境の影響評価と、河川流量計測の高精度化</li> <li>・生態系や海洋循環に影響を与える海洋の温度や酸性化の詳細計測・モニタリング強化及び予測技術</li> <li>・基礎ともなるべき全球炭素収支と炭素循環の各要素の精緻な長期観測</li> <li>・流域の土地利用や植生の状況の的確な把握と、それらの変化が水や土砂の流出に与える影響の予測に関する技術の確立</li> <li>・中小河川の流域の一括監視、降雨予測と流域から河川への流出の予測・監視技術の高度化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・感染症を媒介する生物のサーベイランス</li> <li>・熱中症予防のための情報提供</li> <li>・地域政策立案に資する将来人口やライフスタイル変化予測技術</li> <li>・全球規模から地域スケールまでの気候変動シミュレーション技術により、地域毎の特性を踏まえた精緻な予測</li> <li>・植物育成状況の予測に役立つ日射量等予測技術</li> <li>・農林水産業に対する気候変動影響のデータベース構築と、生産量・育成状況・適正産地等の予測技術の確立</li> <li>・都市の規模に応じた温暖化適応策についての地域評価モデルの構築</li> <li>・農山漁村の景観や伝統文化に及ぼす影響の予測</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食の安全モニタリングツールの開発</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・途上国等海外で容易に使用でき、アクセス性の高いシミュレーションモデルの開発・普及のための取組やシステム構築</li> <li>・海外で発生する気候変動の影響が、食料輸入や感染症など、日本に与える間接的な影響を推定する技術</li> <li>・衛星雨量情報の精度評価と補正手法の開発</li> <li>・衛星雨量情報の活用を念頭に置いた洪水予測技術の開発・普及</li> <li>・無人自動流量観測技術の開発・実用化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・各省連携、国・自治体連携等における基本ツールとして観測・予測データを統合的に解析し、使用するための共通的なプラットフォーム構築</li> <li>・IPCC第5次評価報告書に向けた貢献</li> <li>・ベストミックス社会実現の基礎となる、地球全体を包括的かつ継続的に観測するシステムを国際的な連携により構築</li> <li>・雲や炭素循環等の不確実性低減に向けた基礎的な気候変動プロセスの研究及びモデルの開発・改良</li> <li>・計算機資源も考慮したモデルの高精度化</li> </ul>
【科学技術 2】 要素技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然生態系の固有種の保全、再生技術</li> <li>・自然生態系に関する人為的影響要因の軽減技術</li> <li>・森林伐採時の周辺気温・風況変化への影響を予測し、農業や自然生態系への応用</li> <li>・洪水時の流水・河床の挙動等の精度の高い把握と、それを踏まえた対策立案技術の向上</li> <li>・氾濫流の挙動の精度の高い把握と予測技術の向上</li> <li>・河川環境の変化の予測、対策の効果の評価に関する技術</li> <li>・植物生理特性の気候馴化解析技術</li> <li>・温暖化適応樹種の遺伝特性の改善のための技術</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・イネゲノム研究の成果活用等による高温・乾燥・塩害等に適応した品種改良</li> <li>・栽培・飼育・増殖技術の改善による食料自給率向上</li> <li>・総合的生物多様性管理等の病害虫管理技術の開発による生物被害リスク等の軽減</li> <li>・植物工場などの技術開発による安定的な食料供給</li> <li>・高性能の断熱や防水・防湿を実現する新材料の開発</li> <li>・農林水産物から新素材等を製造する革新的技術の開発・実用化の加速</li> <li>・紫外線の蓄積被曝量に対する皮膚癌や眼疾患等の影響評価</li> <li>・農林水産業に関する生産安定技術についての温暖化影響の限界点の識別</li> <li>・感染症に対する新しいワクチンや治療法の開発</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ITを活用した農林業技術を、環境負荷の少ない生産や生態系維持・保全、各種トラッキングに応用</li> <li>・地域、家族、個人で実施できる感染症予防策など、健康と命を守る技術</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・低湿地林保全や焼畑による土壌劣化防止技術の開発</li> <li>・途上国における気候変動適応作物の開発や、栽培・飼育・養殖技術、海洋環境保全技術の開発</li> <li>・途上国における津波・高潮・海岸侵食対策手法の検討</li> <li>・統合洪水解析システムの開発</li> <li>・水災害リスク評価のための衛星地形データの活用技術の開発</li> <li>・流域規模での水・物質循環管理支援モデルの開発</li> </ul>	
【科学技術 3】 管理・総合化技術	<ul style="list-style-type: none"> <li>・水道の水量確保、水質管理も含めた総合水資源管理技術</li> <li>・極端気象現象等への対処として、モニタリングやデータベースとこれらを活かしたハザードマップなど早期警戒システムの導入</li> <li>・衛星観測データ等を基にした予測モデルの検証によるシミュレーション予測精度の信頼性向上</li> <li>・災害に関する情報を国民に提供する手法の多様化・迅速化に向けた技術</li> <li>・スーパー樹木による温暖化適応樹木の造林技術</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・交通インフラと土地利用を統合した都市設計手法開発</li> <li>・農地水利用解析に基づく灌漑用水量と洪水への影響評価手法の構築</li> <li>・離島等における淡水資源管理技術</li> <li>・水処理システムの省エネ・低コスト化に向けた技術開発・実証</li> <li>・食品リサイクルループ構築の推進、適切な食品リサイクル技術の導入等による効率的なりサイクル</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・(事前情報も含む)災害に関する情報を国民に提供する手法の多様化・迅速化に向けた技術</li> <li>・災害発生時に、住民や災害現場からの迅速な情報収集を図り、関係者が情報を共有するための技術</li> <li>・適応行動支援GISの開発により、個人・世帯・コミュニティの総合的活動支援を実現</li> <li>・気象情報の効果的な提供や住環境の改善による熱中症の防止</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・途上国の参画を促進する農山漁村開発手法の確立</li> <li>・メガデルタ地域などと連携した、社会基盤施設の気候変動適応技術の構築</li> <li>・淡水資源管理や飲料水施設の管理</li> <li>・科学的知見に基づき適応策の優先順を決定するための、国・地域レベルの影響評価手法</li> <li>・アネクメーネ(人間の居住できない、あるいは非常に困難な地域)をエクメーネ(居住可能地域)に転換する技術総体の実現</li> <li>・国際洪水イニシアチブ(IFI)等の国際情報ネットワークを活用した「世界洪水年鑑」(仮称)の作成</li> <li>・気候変動に伴う全球及び特定脆弱地域への洪水リスク影響と減災対策の評価</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・産学官がそれぞれ進める対策を統合化する技術、成果共有のための枠組みの構築</li> <li>・モニタリング技術に支えられた、行動結果のフィードバックによる軌道修正や計画変更等の管理技術の構築</li> <li>・将来人口構成や人間の思考変化を考慮した対策の検討</li> <li>・諸外国に対する適切な知財戦略の行使</li> </ul>

分類	①気候変動に柔軟に対応できる安全・安心な国土・都市づくり	②健康で快適な国民生活と元気で豊かな地域の実現	③国民一人ひとりが行動できる環境づくり	④ベストミックス社会形成のための国際連帯	共通的な配慮事項、特に必要な連携
<p>【科学技術4】 政策・計画に資するための技術</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・対策案を比較するための水災害リスク評価手法の確立</li> <li>・自然生態系サービス維持についての優先順位付け方法の構築</li> <li>・低炭素社会実現に向けた社会構造と両立した防災計画の構築</li> <li>・GISを利用した脆弱性評価手法の開発、リスクマップの作成</li> <li>・長期的な水需要を考慮した、ストックマネジメント等を含む効率的な水道経営手法の開発</li> <li>・保険等の経済システムを活用した社会全体の適応能力の向上</li> <li>・災害対策を考慮した都市設計、災害の軽減や都市環境の改善</li> <li>・建築・土木等におけるライフサイクルマネジメント実現のための技術開発</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の都市分類型に沿ったモデルを通じた適応策の種類や必要時期の整理</li> <li>・経済的ベストと地域的均衡のバランスを保った対策</li> <li>・国道や1級河川等の影響も取り込んだ分析により、地域の状況に応じた費用対効果の高い対策の実施</li> <li>・感染症、病虫害、外来魚種、有害生物等の発生予測・対応技術開発と要警戒地マップの作成</li> <li>・自然や土地に根ざした伝統産業の保護</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食の安全性や緩和策、適応策を実現する農業・林業の方法を社会システムとして構築するための技術</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・国際機関と連携した監視システム構築や、ハザードマップ、高度な世界食料需給モデルの作成</li> <li>・わが国気候変動予測・適応技術の他地域への適用支援</li> <li>・REDD(森林減少と森林劣化による排出の削減)やカーボンオフセット等の国際的な流れへの、生態系管理や農業生産の組み込み</li> <li>・洪水リスクマネジメント手法の開発</li> <li>・ハード・ソフト対策による洪水リスク軽減効果の評価手法の開発</li> <li>・気候変動下における水文統計解析手法の開発</li> <li>・海岸植生を活用した津波・高潮対策ガイドライン(案)の作成</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・分野毎の適応策を最適に組み合わせ、相互干渉を回避するための方策</li> <li>・高齢者を標準とした社会システムの構築</li> <li>・BCP(災害や事故などの予期せぬ出来事に備えた、事業継続・復旧のための行動計画)の概念を取り入れた社会構築</li> <li>・人口変化や分布、エネルギー価格などの鍵となるパラメータを抑えたシナリオ構築</li> <li>・時間軸を考慮した国としての適応計画の策定</li> </ul>
<p>【科学技術5】 人材育成、教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自然生態系の現地外保全等に対するコンセンサスの形成</li> <li>・国民の総意としての気候変動適応あるいは環境保全の意識を育むための環境教育の制度化(カリキュラム・教科書制定、義務教育における必修化、等)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長期的に増加傾向にある紫外線量に対する、皮膚癌や眼障害等への認知度を高める</li> <li>・農林水産業の生産安定技術の生産現場での実証・普及</li> <li>・地方自治体が適応策を立案するための科学的根拠の提供</li> <li>・ヒトの適応において重要と思われる生気象学、生気候学の分野の充実</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人文社会科学が連携した「気候適応学」の発展</li> <li>・一般国民に対する気候変動に関する体系だった情報提供</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海外研究者との共同研究による我が国のシミュレータ技術の理解増進</li> <li>・気候変動適応策の国際ルールづくりへの積極的な参加・貢献</li> <li>・各国政策決定者への提言インプットを図るため、国際研究機関や各国の研究者との共同研究を推進</li> <li>・科学技術外交の行使による諸外国への環境マインドの浸透</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・対応しきれない適応策の限界の理解</li> <li>・科学技術外交の最大限効率的な実施</li> </ul>
<p>緩和策や地域環境、社会経済等とも相乗効果のあるコベネフィット型施策(再掲含む)</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・適切な森林管理による炭素吸収能力と木質資源の有効活用によるシーケストレーション(森林による二酸化炭素固定)機能、およびコベネフィットとしての多面的機能の発揮</li> <li>・ヒートアイランド対策による省エネルギー促進</li> <li>・森林資源を核とした緑の産業再生(CO2吸収源となる森林の間伐、林内路網の整備、住宅・公共施設等への木材利用、木質バイオマスの燃料利用等の促進)</li> <li>・バイオマス等地域の特性や自然資源を生かした再生可能エネルギー等の面的な利活用の促進</li> <li>・環境コミュニティ・ビジネスの促進</li> <li>・既存施設の有効活用等による公共投資負担の軽減</li> <li>・廃プラスチックの総資源化(都市油田開発)</li> <li>・コベネフィットの有効性の高度化(例えば、炭素固定のための森林を、寒暑への適応や生態系サービスの機能発揮、水循環の改善に有効利用する)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活パターン変化に対応した省エネルギー方策</li> <li>・効率的な公共交通網の整備による低炭素化</li> <li>・イネゲノム研究の成果活用等による高温・乾燥・塩害等に適応した品種改良</li> <li>・栽培・飼育・増養殖技術の改善による食料自給率向上</li> <li>・総合的生物多様性管理等の病虫害管理技術の開発による生物被害リスク等の軽減</li> <li>・植物工場などの技術開発による安定的な食料供給</li> <li>・高性能の断熱や防水・防湿を実現する新材料の開発</li> <li>・効率的かつ安全な風力発電基地の設計を行うための、年間を通じた数値風況精査技術</li> <li>・海流や海水予測等に基づく漁船等の効率的、省エネルギー運航技術</li> <li>・森林・木材製品の炭素蓄積と社会のニーズに即した木材供給のバランスを取るための、フルカーボンアカウンティング手法の開発</li> <li>・膜技術等、我が国の水処理技術に加え、水処理オペレーション能力を開発し、世界の水ビジネス市場へ参入</li> <li>・超長期木造住宅によるカーボンシーケストレーションと、木造住宅の利便性(耐暑耐寒性、吸湿性、快適性等)発揮のコラボレーション</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ITを活用した農林業技術を、環境負荷の少ない生産や生態系維持・保全、各種トラッキングに応用</li> <li>・オンデマンド・シェアリング型の公共交通システム普及による環境負荷の低減</li> <li>・食育による効率のよい食生活の普及啓蒙と省エネ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・海外における温暖化適応作物開発や養殖技術、海洋環境保全技術の開発</li> <li>・REDD(森林減少と森林劣化による排出の削減)やカーボンオフセット等の国際的な流れへの貢献</li> <li>・アジアにおける低炭素・低公害社会の実現、3Rの促進による循環型社会の実現、気候変動にも適応した自然共生社会の実現</li> <li>・荒廃地、乾燥地の大規模緑化による炭素蓄積と気候緩和、水資源の涵養</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・社会サービスを維持するために必要な資源・エネルギー量の推定と、そのために必要な技術革新の整理</li> <li>・農地土壌炭素貯留、森林管理、海洋の炭素吸収機能に関する技術開発あるいは今使える技術の供与・普及</li> </ul>